

# 末黒野

すぐろの

12月号 (通巻808号)



秋

冷

小川玉泉

秋を咲く夕菅街の緑地帯

叩きたる秋蚊思ひのほか小さき

雨俄か酔ひ半ばなる酔芙蓉

鉦叩独りとなれる身を支へ

今日の月遺影の妻と拝みけり  
父さんと呼ばれしは夢つづれさせ  
妻恋ふや膝に秋冷にはかなる  
句会果つ黄金びかりのうろこ雲  
朝冷や戻す若布のうすみどり  
舗装せる坂を打つ音櫟の実  
行く人へ季を告ぐるかに白桔梗  
十五夜の月愛でらると思ひしに

悼 小田嶋正敏氏

# 奈良秋色

松本三千夫

般若寺

弥陀仏の御目切れ長爽やかや

新薬師寺

円陣の十二神将秋深み

西の京六句

薬師寺へ歴史の道や彼岸花

薬師寺の塔の裳階や風の色

水煙の笛吹く飛天秋澄める

鑑真廟へ破れ築地や彼岸花

伎芸天のその手その腰さはやかに

秋深みわれ見そなはず伎芸天

室生の里

磨崖仏聳え室生の豊の秋

初瀬・桜井三句

登廊木立隠りの彼岸花

懸け造りの長谷寺桜もみぢして

十三重の塔や色なき風絡み

# 甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）

## 秋の潮

大橋伊佐子

括りてもなほ風呼びぬ庭の萩  
桐一葉落つるを一人見てゐたり  
ともすれば萎ゆる心や鉦叩き  
手折り来し野の花壺に月今宵  
余生なほ捨てぬ夢あり十三夜  
真砂美しく引き残しけり秋の潮  
爽秋やよく生き来しと振り返り  
流星や九十年を生きし空  
支へられ繋ぐ命や敬老日  
抜け道を抜け来し咎や草風

## 月明

黒滝志麻子

人力の飛び出す町の残暑かな  
濠端の走者ひたすら今朝の秋  
盆波の置いてゆきたる海星かな  
盆花のむらさき深し山の宿  
少年の剣道の声小鳥来る  
小鳥来る光と陰の生るる梢  
秋澄むや火口湖藍を深めたる  
湖の風ふふみ開きぬ沢桔梗  
帆柱の秋天をつく船溜り  
月明や波打際にある旅愁



# 乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は  
次号は末尾になり以下同じ）



花野

石黒興平

回廊の幽かな軋み風涼し  
葉裏見せ風に応ふる蓮かな  
船頭の手馴れなる唄蓮見舟  
街の灯をはるかに烏瓜の花  
ざつくりと帽子を洗ふ残暑かな  
深爪の右足痛き秋暑かな  
丈低き草より昏るる花野かな

小鳥来る

吉田きみえ

葉鶏頭

岡田史女

女の子背にして父の平泳ぎ  
木漏れ日の麓の一樹小鳥来る  
池よりの流れに沿うて蕎麦の花  
鳥声の谷戸や捨て田の彼岸花  
かなかなの次の声待ち溪深し  
震災の母の故郷や梨とどく  
別れ来て灯点し頃の蟬しぐれ

駅頭や処暑の豪雨のひとしきり  
身の内の闇いつよりぞ葉鶏頭  
稲光島の吊橋たわたわと  
蝗とぶ乾く手のひら足のうら  
竹林を透きとほる風赤とんぼ  
秋の日の円光を負ひ観世音  
車座や秋の蚊遣りを足元に

醉芙蓉

岡野里子

初秋

加藤静江

一閃の日矢炎昼の観覧車  
遠鴉汝も眠れぬか熱帯夜  
路地裏のはや夕づきぬ酔芙蓉  
手に触るる幽き湿り芒の穂  
笹の葉に玉なすひかり涼新た  
沢音や帳場に萩と招き猫  
校舎より響く和太鼓秋澄めり

紺碧の空押し上げて雲の峰  
唾蟬の闇をこぼるる羽音かな  
庭へ出て音に向へり遠花火  
初秋の堰音ひびく草の丈  
露草の青を洗ひぬ昨夜の雨  
近道の思はぬ狭さ葛の花  
野分後空を占めたる夕茜

花蕎麦

小倉正穂

秋扇

菅野日出子

切通し抜けくる風や涼新た  
二度三度秋めく風を深く吸ふ  
白極む芙蓉にこころ洗はるる  
一望の花蕎麦染めて夕日濃し  
桔梗や風呂敷はみな批のもの  
穏やかに低き家並や厄日過ぐ  
木犀や程よき場所に椅子置かれ

韋駄天のごとく駆け抜く処暑の雨  
高僧の説法長し秋扇  
バス停へ寺院を抜けぬ草じらみ  
夕日負ふ芭蕉の座像鳥渡る  
月島の路地に迷へり草の花  
すぐそこと言ふ民宿や月見草  
灯下親し細字にルーペかざしをり

# 青炎集

横浜 神谷さうび

初紅葉愛でて古刹の門に入る  
雲とらへ水面はすでに秋の色  
塔頭に人かげ見えずつくつくし  
きざはしへ枝垂るる萩や咲き初めて  
水澄むやきらきら動く魚の影  
**仏飯を常より高く今年米**

横浜 橋場美篤

濃紺の空へ祭の木遣唄  
雨後の鳶の笛美し今朝の秋  
**流れ藻のたゆたふみどり水澄めり**  
秋茄子戸板に婆の小商ひ  
暮れ近き森を鎮めて葛の花  
はま梨と太文字躍り直売所

# 小川玉泉選

横浜 土田亮

翡翠の瑠璃の一闪沼の杭  
**家紋浮く高提灯や魂迎**  
うから来て仏間賑はふ盆の家  
凶書室の黙破られぬ法師蟬  
ホース干す火の見櫓や震災忌  
蔵町に疏水や群るる銀やんま

横浜 波多野孝枝

戦争を孫へ語りつ庭花火  
**夫の忌を修する故郷盆の月**  
無理効かぬ齢となりぬつくつくし  
釣り糸を投ぐる突堤涼新た  
同年のいとこの通夜や星流る  
旧盆や漁船の紡ふ船溜り





横浜 大橋弘子

**叡山の揺らぐばかりの蟬時雨**

奥入瀬の溪流へ落つ滝の数

目覚めたるままに聞き入り夜半の虫

ねぶた来る先陣切つて跳ぶ跳人

花芒わづかにありぬ恐山

涼新た難所の多き川下り

横浜 田村加代

からたちの青き実の数風の辻

庭手入れすみたり木々に秋の雨

水量計橋脚に古り燕去ぬ

あかず見る破璃を透けたる天の川

**白樺の白の浮き立ち蔦紅葉**

バス停の木蔭どんぐり降り止まず

横浜 鍋島武彦

心なし風柔らかき今朝の秋

安曇野やせせらぎに聞く秋の声

朝顔や路地は駅への隠れ道

**コスモスや通ひ牧師と言交はず**

真向ひに富士や峠の月見草

書に倦みて明りを消しぬ虫時雨

横浜 柚木澄

悲なく一ト日の暮れぬ遠火花

**森の音全て呑み込み蟬時雨**

八歳の記憶まざまざ敗戦忌

新涼の風の気配や朝戸繰る

震災忌飲料水を買ひ足して

坂道に一息つくや昼の虫

横浜 川村亘子

引く波のつぶやく渚雁渡し

宵星やかなかなの声透き通り

**鈴の音に孤を深めをり盆の月**

潮風や処暑を越せども入日濃き

ひぐらしや午後の日陰の深まりて

灯さざる船の影あり月今宵

横浜 上月智子

蛇衣と見紛ひ百合の花の鏝

雲ひとつ映る入江の晩夏かな

**いとまごふ頃合火花始まりぬ**

朝顔の咲き損なへり明けの雨

母の忌や色付き初めし実むらさき

高層のビルに映ろひ罫雲

# 耕 土 集

## 松本三千夫選

箸とめて利き耳たてて虫の秋

横 浜 山本 茂子

徒花の音なき落下糸瓜棚

龍 町子

ゆるやかに小庭を巡り秋の蝶

未成りの蒺藜元のいびつかな

柚子買ふや夕餉に使ふ訳でなく

稜線の黒々と見ゆ秋夕焼

検針員笑顔こぼせり秋の路地

流木の打ち重なるや宵月夜

穴惑ひ原発事故の収まらず

格子戸も眠らぬ町や風の盆

柿熟るる子規に晩年なかりけり

横 須 賀 齊 藤 眉 山

半纏の物言ふ技や松手入れ

山 口 郁 子

秋の風墓のひとつは猫ならむ

虫の音につられ唱歌を口遊む

携帯の友と語らひ月見酒

明け遣らぬ十六夜月の白きかな

軍服の父の一葉夜の秋

豆腐屋の豆の匂ひや涼新た

昏れ泥む野にありてこそ吾亦紅

彼岸花仏待つごとと天仰ぎ

野分あとしだるる萩に裳裾濡れ

横 浜 加 瀬 伸 子

秋の蝶雨後をひたすら揺蕩ひぬ

今 野 明 子

京菓子子の苞の紐解く十三夜

入日射し彩ふ花野の際立ちぬ

四阿に迅雷しのぎ小半時

方丈を吹き抜くる風さやかなる

星影の失せて艶増す今日の月

颱風過天を一掃地を碎き

底紅や一期の栄え咲き尽くす

名月や庭の草花手折り活け

